

蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題

—— 第五回 表記「毛人」「蝦夷」の起源と呼称エミシとの結びつき

荒木陽一郎

はじめに

本稿では、表記「毛人」「蝦夷」の起源と、それに呼称エミシがどのように結びついたか、という問題に関して、先学の研究に依拠しながらまとめてみたい。

ただし、私自身、これから述べる説を絶対的なものとは考えていない。元来残された史料が少ないため、幾分仮説的な部分があることは否めない。今後の出土文字史料の新発見などによって、説の修正を加えるべきときも来よう。とりあえず、現時点でのパラダイムとでも言おうか、最も矛盾のない解釈と考えるものである。

論説の順序として、はじめに結論を全て述べることにする。根拠とした論稿は補註で示すことを原則とするが、次の四点に関しては、二において詳しく補足説明したい。

- A 《呼称エミシの語源（由来）》
- B 《呼称エミシと表記「毛人」の結びつき》
- C 《表記「蝦夷」の起源（由来）》
- D 《表記「蝦夷（螻）」の出現時期・始用背景と表記「毛人」との関係》

なお、これまでと同様、史料に見られる表記は「」をつけて書き、言葉の発音（呼称）は「エミシ」のように片仮名で書くことにする。それ以外の「」のつかない「蝦夷」は一般的な意味で用いていることをおことわりしておく。

一、結論

1 どのくらいまで遡るかは不明だが、もともと一人で百人の働きをするような《武勇にすぐれている》人を、日本ではエミシと呼んでいた。当初エミシは東北地方の人々を特定して指す言葉ではなかった。そして、このエミシはおそらくアイヌ語由来ではない。¹⁾

2 呼称エミシの中には《武勇にすぐれていて良い》といったプラスの意味において、人の名としてつけられる場合があった。しかし、その力強さも、味方ではなく敵方のものだとして《手強さ憎し》という意味になる。中央の人が記した文献に「魁帥」と呼ばれるような人々も生まれてきた。

3 後者は、当初はヤマト王権より西方に多かつたが、「名代部の西↓東への移動」「東方進出への出発点としての伊勢の重視」「稻荷山鉄剣銘」などに象徴されるように、雄略朝を画期として東方に多くなる。⁽²⁾

4 ヤマト王権にとつて東方が重視されるようになったのち、そうした東方を指す表記として、中国の古典に由来する「毛人」が用いられるようになった。「毛人」表記が、中国の『山海経』などの書に由来することに關しては、現在のところ諸説一致している。⁽³⁾『山海経』は地理書としての性格のほか、異物志・祭祀書・卜書としての性格を持つ書物であり、前者に後者の性格が絶えず組み合わされた形で現れるため、その内容がどこまで事実の反映かという点になると、疑問が多い。⁽⁴⁾したがって、『山海経』に登場する國のすべてを、実在した民族なり種族に特定することは困難である。ただ、「毛人」表記が、中国的に東夷(具体的に中国から見て海外の東北部に所在)のあるありかたを觀念的に表したものである点は確かと思われる。⁽⁵⁾「毛人」表記が日本で使われるようになった具体的な時期とは、『宋書』の倭王武の上表文が倭人の手によるものならば『宋書』が成立した時点、そうでなければ七世紀が下限と考えられる。ここで、呼称エミシと表記「毛人」が結びつく。

5 やがて、七世紀中頃になり、ヤマト王権の侵出が東北地方へ及ぶに伴い、「毛人」エミシは、東方の中でも、主として東北地方の人々に對して使われるようになっていく。一方、呼称エミシが本来意味して

いた《武勇にすぐれている人々》の意味もまだ失われず、人名などに残っていく。

6 ヤマト王権の東北侵出に伴い、ヤマトの人々は、東方やさらに東北について、新たに具体的な知識を持つようになる。するとその時点で、東北地方を指すようになりつつあった「毛人」が、漠然と東方も指すし、《武勇にすぐれている人》の意味で人名にも用いられるので混乱がおき始める。そこで、「毛人」表記以来の多毛という觀念を引き継ぎながら、東北地方の人々を区別して表す表記として、「蝦蟇」や「蝦夷」という表記が新たに用いられるようになる。ここにおいて、呼称エミシと表記「蝦夷」が結びつく。

7 表記「蝦蟇」と表記「蝦夷」では、「蝦蟇」の方が古い。「蝦蟇」は「毛人」と同様人名表記に用いられるなど、その表記に對する差別意識はまだ低く、人々の間で忌避されていなかった。なお、表記「蝦蟇」「蝦夷」が中国で作られた表記か、日本で作られた表記か、あるいは中日合作かという点に關しては、議論もさまざま上に、材料不足で結論を出し難い。

8 それに對して「蝦夷」は人名にはほとんど用いられず、「夷」字に象徴されるように、その使用開始時から中華意識が込められていた。律令制度の整備や畿内制の成立などを経、中国的な華夷思想が強まることを背景に、「蟻」ではなく「夷」を用いた「蝦夷」表記が、好んで用

いられるようになる。また、呼称の方もエミシに変わって差別意識を込めながらエビスという読み方が普及していく。

ただし、「夷」字が一字だけで用いられる場合、当初はそれをエミシとすることはなく、次のように明確に使い分けられていた。

表記「夷」 〓 呼称ヒナ 〓 化内民

表記「蝦夷」 〓 呼称エミシ 〓 化外民 (6)

←

9 「蝦夷」は次第に王化され、中には律令公民化の道をたどる者も現れてくる。すると、広義の「蝦夷」の中に、狭義の「蝦夷」や「俘囚」といった分類的な表記が現れ、その総称の「夷俘」表記が登場する。

やがて、いわゆる三十八年戦争の終結とともに「蝦夷」表記が消滅し、エミシ(エビス)の表記は「蝦夷」から「夷」に変わっていく。この点に関しては、本講座第二回で時代背景その他、詳しく述べたのでここでは省略する。(7)

←

10 《武勇にすぐれている人》の意味で人名となった「毛人」の他に、(肥国の人)「肥人」のように)毛野国の人)「毛人」という人名も存在したかもしれない。しかし、九世紀半ば以降、「毛人」という人名はすたれる。これは「蝦夷」〓エミシ〓エビスに対する蔑視観や敵対意識高揚の影響であろう。

また、エミシから変わったエビスという呼称も、東国の住民(王朝の貴族たちから見た、東方の、都から遠く離れ文化の届かない国の住民)を指すようになり、東北地方の人々を特定しなくなる。おそらくこの

ころから、東北地方の人々を指す蔑称としての呼称エゾが広まるのだと思われる。(8)

←

11 弘仁年間以降は「夷」表記が一般的になり、「蝦夷」表記はほとんど見られなくなる。ただ全くなくなるわけではなく、古典に範を求めた場合や古辞書などには用いられることもあった。そうした中で、唯一、中世的な「蝦夷」の用いられ方をしている例として、津軽安藤(東)氏関係の史料にみられる「蝦夷」表記がある。この点に関しては、本講座第三回で詳しく述べた。(9)

二、補足説明

A 《呼称エミシの語源(由来)》

呼称エミシに関して、前稿で導き出した結論は次の通りだった。(10)

* エミシは『日本書紀』編纂時以前から既に存在していた語である。

* エミシの初見史料である神武紀歌謡の「愛瀾詩」を「蝦夷」「夷」と

同意義に解釈することは難しい。

* 即ち、呼称エミシには「蝦夷」や「夷」を指す場合と、「愛瀾詩」のように「蝦夷」「夷」以外の意味で用いる場合とがある。

* 神武紀歌謡の通り《一人で百人の働きをする》ような(在地の)統率者》という意味のエミシは、《人》を意味すると言われているアイヌ語エンチュウを起源としない。

以下、エミシの語源に関して、もう少し詳しく検討しておきたい。

エミシの語源については、江戸時代から今日に至るまで多くの試論が提示された。特に(あ)呼称と表記の関係や(い)アイヌとの関係が、説のわかれるところである。⁽¹¹⁾まず(あ)について簡単にまとめる。

古くは本居宣長が、「蝦夷」の鬚の長いさまが多毛なアイヌに通じるところから、エビシという語が生まれたと説いた。⁽¹²⁾同じ「蝦夷」由来ではあるが、村上島之丞・松浦武四郎は、アイヌが鄭重な挨拶をかわす際の身をかめる態が「蝦夷」を思わせるところから、エビシという語が生まれたとしている。⁽¹³⁾これらの説は「蝦夷」↓エビシ↓エミシという呼称の成立と、「蝦夷(夷)」↓「蝦夷」という表記の成立が同時である点の特徴としている。

坪井九馬三氏はアイヌ語の「エムシ(エモシ)」「刀」に由来すると考へ、本居宣長や村上島之丞・松浦武四郎のように特定の民族の風俗・風習由来とは違い、その語に「武人」「勇猛な人」といったニュアンスがあることを漂わせている。⁽¹⁴⁾

坪井氏の場合、アイヌ語を話す人々との接触がこの語の成立の前提となっているが、同様にアイヌ語由来のものとしては、金田一京助・大野晋・田村すず子氏ら言語学者がカラフトアイヌ語雅語で「人」(自称)を表す「エンチウ」・「エンジュ」に由来する、⁽¹⁵⁾としている。この金田一京助氏・大野晋氏・田村すず子氏の説は歴史学者に支持者が多く、言わば定説化している感もある。

ところで喜田貞吉氏も、エミシの語源を「エビシ」「エムシ」「エミシ」とも言い換えている(筆者注)というは刀剣を現し、勇猛なものを現し

たのである」ということに求めている点では坪井氏と同意見である。しかし、坪井氏とは反対にエミシを日本語と考へ、「武の点では劣る」「文化の進んだ民族」に対し「勇猛好きで武人的の技術をそなえている」ところの「未開人」すなわち「異民族」全般をさした語とみなした。⁽¹⁶⁾

これに比較的近い立場を採っているのは工藤雅樹氏で、「坪井氏の(筆者注)エミシの原義に勇者の意があるとする推測は傾聴に値する」とし、「むしろエミシは、勇者の意の日本語に由来すると説明したほうが良いのではないか。そうすれば、エミシの名が貴族にも用いられたこと、神武紀の歌の解釈、そしてエミシの転訛であるエビスに武人の意のあることなどが容易に理解できるであろう」と述べている。⁽¹⁷⁾

以上の坪井・金田一・大野・田村氏の説および喜田・工藤氏の説は、それがアイヌ語に由来するか日本語に由来するかの違いはあれ、「蝦夷」や「夷」などの表記と関係なくエミシ呼称が成立したとする点で共通している。

さて、喜田氏同様「エミシ」の語源を日本語に求めたものとしては、松岡静雄がとなえ、村尾次郎・高橋富雄氏によつて支持された「弓人」説がある。これは「夷」字が「弓」と「大」人から成ることに着目し、「夷」↓「弓人」↓ユミシ↓エミシとなった、というものである。また、新村出氏は「弓師」説をとなえている。⁽¹⁸⁾つまり「夷」という表記が先にありそれから呼称が派生した、とする点で、表記と呼称が同時に成立するという説や、呼称が表記と関係なく成立したとするこれまでの説と異なる。

次に(い)だが、本居・村上・松浦・坪井・金田一・大野・田村氏らの

説は、「都の人がアイヌ語を有する人と接触を持っていた」ことをその大前提としている。中でも本居・村上・松浦らはアイヌ語のみならず、アイヌの風俗・風習と密接に関連して呼称エミシが生まれたとする。

山田秀三氏のアイヌ語地名の研究によれば、アイヌ語型地名の密集地帯の南限線は、東は「仙台の北の平野の中」、西は「秋田県、山形県境の山」で、それ以南は関東北辺までアイヌ語らしき地名こそあれ、分布が減少しているようである。⁽¹⁹⁾この南限線は、畿内型古墳分布のほぼ北限であり、江別・後北式土器出土の南限であり、また、郡山遺跡・多賀城をはじめ、「征夷」戦の前線でもある地域である。すなわち、「蝦夷」と表記された人々の居住域とアイヌ語地名の分布に大きな共通点が認められ、「蝦夷」の中に「アイヌ語族」が多かったことを示唆している。

これらのアイヌ語地名の古さというのも問題になるが、例えば斉明天皇四（六五八）年の「後方羊蹄」、「都岐沙羅」などはアイヌ語風であり、逆にカムイ・タクサ・などアイヌ語に残っている日本の古語の古さを考えると、奈良朝以前から和語族とアイヌ語族の接触はあったと思われる。⁽²⁰⁾そして具体的に東北への進出が始まる七世紀後半には、和語族の中の特に「都の人」もアイヌ語族と接触し、その結果、『日本書紀』にアイヌ語地名が記載されたものと思う。

以上から、とりあえず大前提の「都の人がアイヌ語を有する人と接触を持っていた」ことは確認できた。しかし、エミシの語源をアイヌ語に求めるとなると話は変わってくる。

歴史学者の間では強く支持されているエミシ―エンチュウ由来説だが、言語学の立場からは幾つかの批判が成されている。それは次の点である。

①エンチュウ↓エミシの語形変化は不可能もしくは困難である。仮に可能としても、金田一氏の推定するエムチュウのような中間形が存在していない。⁽²¹⁾

②金田一氏があげたエンチュウの例は一つしかなく、その点でアイヌ語での自称としての普遍性が疑われる。⁽²²⁾

③金田一氏があげたエンチュウの例は『北蝦夷古謡遺篇』の「タニ、アナク子、アリキリカムイ、アリキレンチュウ・ポノタシュツク」(さて今は、半ばは神、半ばは人なる、ポノタシュツク。金田一訳)だが、浅井亨氏が指摘するように、別のところでは「カムイ、ヘ子、ヤ、アイヌ、ヘ子、ヤ(神にやあるらむ人にやあるらむ)」などとエンチュウは用いられていないし、児島恭子氏が指摘した久保寺逸彦氏『神謡聖伝の研究』の神謡44でも

「akou yupi ene yehi i-enkouke ta arke ainu ne arke kamui ne
sisak ranetok an ruwe-ne

(私の兄さんが言うには「川上の隣村に半ばは人間で半ばは神である無双の豪傑が住んでいる」)
のように「アイヌ」が用いられている。⁽²³⁾

④記録されて残っている樺太の口承文芸を探しても「エンチュウ」の類の語はほとんど出てこない。また北海道・千島に現在エンチュウは残っていない。⁽²⁵⁾

⑤知里真志保氏があげているエンチュウは、服属形が語尾についているが、そうした文法的な面での検討(例えば話し言葉でも文脈によって変化しよう)が不備である。⁽²⁶⁾

一方、近年、菊池徹夫氏がエミシーエンチュウ由来説を補強する説を発表した。菊池氏は、樺太アイヌ語におけるエンチュウについて、アイヌの故藤山ハルさんの話を引用している。そこでは：

・「エンチュウ」は「アイヌ」と同じように、人とか人間を意味するが、「エンチュウ」は「アイヌ」よりずっと古くて立派な言葉だ。

・マオカ（真岡＝ホルムスク）では、普通の時でも「エンチュウ」を使っていた。

そして、

（平安後期以前）

（平安後期以降）

自称（アイヌ語） エムチュウ ↓ エンチュウ ↓ エンヂユ

←

←

他称（和語）

エミシ

↓

エンジョ

↓

エゾ

という対応に結論づけている。⁽²⁷⁾

仮に菊池説により、前に掲げた②と④は解決するとしても、まだ①③⑤の点が残る。しかし、それは言語学の分野のより詳しい検討をまたねばならない。それをしなければ、歴史学者が都合のよいところのみを引用した、と思われても仕方がない。

誤解のないように申し添えておくが、私もアイヌ語にエンチュウという自称があったことは決して否定しないし、エンチュウ由来のエミシがあってもおかしくはないと思う。だが、前稿で結論づけたように、明らかにアイヌ語由来ではない呼称エミシが存在するのも事実だし、神武紀歌謡のエミシや人名のエミシはアイヌ語由来ではなからう。⁽²⁸⁾

ところで、エミシーエンチュウ由来説の是非を考える際に、これまでの歴史学者たちの研究には、大きなエア・ポケットが存在したように感じ

る。極端な話、以下に述べる研究上の安易さを克服しない限り、議論の進展はないだろうと思われる。⁽²⁹⁾ それは、言語の借用関係を一つの単語だけから考えてきた点である。ここでは、文化地理学者である諏訪哲郎氏の研究を例に、⁽³⁰⁾ 自分を含め、歴史研究者に反省を促したい。

チベット文明に大きな影響を受けたモンパ族がもともと所有していた基層文化を究明するための一つの方法として、諏訪氏は徹底した言葉の比較を行った。すなわちモンパ族の語彙とチベット語の語彙を比較して、チベットから流入した文化要素を判断し、その文化要素をこんにちのモンパ族の所有文化から取り除くという作業である。注目すべきは、その際に比較した文化要素が、「獵狩・漁撈」から「農耕」「牧畜」「交易」「服飾」「食事」「金属・工芸」「建築」「医療」「宗教・芸能」「時間・空間」の十二ジャンルに及び、比較した語に至っては、なんと二七七種に及ぶ点である。

異なる言語文化を持つ集団間の言語の借用の研究も、このようにあらゆる文化要素について検討し、その上で語るべきであろう。たった一つや二つの言葉のみを取り上げて借用関係を語るのには、歴史学者の安易さと取られても仕方がない。一つや二つならば、全く接触のない文化集団間でも、偶然同じになる、ということだって有り得る。

これを本稿にあてはめてみるならば、アイヌ語と日本語の比較は、エンチュウとエミシのみで行うべきでなく、もっと広い語の比較の中で行うべきということである。しかし、現実には苦しい。なぜならば、奈良・平安時代以前のアイヌ語が文字記録として残っていないため、わからないからだ。下って江戸時代であっても、佐々木利和氏の論文によれば、シ

ヤモが記録したアイヌの語彙集には、蝦夷通詞によって作り出された日本語的アイヌ語が多いとのことで、比較することは困難を極めよう。⁽³¹⁾ また、白尾忠悦氏の論稿などを見ると、「交通の奔達」という一つの要因からだけ見ても、想像をはるかにこえた言語の変容があることがわかる。⁽³²⁾

少し回り道をした。話を元に戻そう。それでは、エビや刀など、アイヌの風俗・風習に由来する説というはどうであろうか。

問題は、奈良時代以前に、近・現代のアイヌの風俗と同一のものをもっている人々が存在したか否か、という点にある。

これに関しては、佐々木利和氏が「……近世以前に観察され記録された蝦夷の風俗は、聖徳太子絵伝によつて考察する限りでは、平安時代と鎌倉時代・室町時代以降とに大きな隔りがある。鎌倉時代以降の蝦夷はエゾであり、アイヌであるといつていい。しかし、平安時代はまだエミシであつて、それをアイヌと呼ぶことについては、現段階ではまだ困難であつた。この観点から近世以降に観察されたアイヌの風俗習慣のほとんどは鎌倉時代にはすでに成立していたと考えられるであろう。いいかえればアイヌ文化の重大な転換期は平安時代末期にあつたと思われるのである。」と述べているが、この点から考えても、近・現代のアイヌの風俗で奈良時代以前の呼称の由来を考えるのは無理であろう。

また、アイヌ文化の母胎を擦文文化に求めるかオホーツク文化に求めるかという物質文化の上での議論があるが、それはあくまで擦文文化やオホーツク文化がベースなのであつて、もちろん二者択一とは限らず、アイヌ文化はさらに多くの要素の複合文化という見解が主流である。⁽³⁴⁾ よ

つて、アイヌの風俗・風習と密接に関連して呼称エミシが生まれたとする説も、支持しがたいのである。

以上の点から考えると、呼称エミシは必ずしもアイヌとの関係でとらえる必要はない、という結論に達する。では日本語ならば、何に由来するかというと、私自身未だわからない。ただ、「夷」字に由来するという新村・高橋氏の見解への批判も含め、「蝦夷」や「夷」などの表記より古くから存在した呼称であろうことや、蝦夷を指す以外にも意味を持っていることなどは、前稿や本稿でふれているとおりである。

B 《呼称エミシと表記「毛人」の結びつき》

古代日本に於ける「毛人」表記を概観しておこう。⁽³⁵⁾

①まず古くは『宋書』東夷伝倭人条の倭王武の上表文に、
…東征毛人五十五國、西服衆夷六十六國、渡平海北九十五國。…
とある。この上表文、特に「毛人」表記が、倭人の作成によるものかどうかは問題があるが、仮にそうだとすれば「日本における最古の「毛人」史料」として、中国のものだとしても「中国が日本と毛人とを結びつけたことを示す史料」として重要である。

②『記紀』『六国史』には次の一例のみである。「〔〕」は割注

『日本書紀』敏達天皇十年春潤二月条

十年春潤二月。蝦夷數千寇於邊境。由是召其魁帥綾糟等。〔魁帥者大毛人也。〕詔曰。……（後略）

この場合本文でなく、割注で「魁帥」を説明する語として登場する点は

注意しなければならないだろう。その他『六国史』には、『日本後紀』並びに『類聚國史』の延暦十六年二月己巳条に、類例として「毛狄」がある。

③法典関係では、『令集解』賦役令邊遠國条の古記に二箇所、賦役令没落外蕃条の古記に三箇所、考課令增益条の或云に「毛人國」という形で一箇所、登場する。多くの令注釈の中で、特に大宝令の注釈書である古記に集中していること、或云では「毛人國」のように『山海經』に近い表現であることが注目される。

④空海『性靈集』の「贈野陸州歌」に、

「前略」毛人。羽人。接境界。(後略)「前略」毛人面縛。側城邊。(後略)とある。「毛人」が『山海經』の「毛民」の伝統を引いていることは前述した。同じように、ここに出てくる「羽人」も、『山海經』海外南經の「羽民國在其東南。其爲人長頭、身生羽……」や大荒南經の「有羽民之國、其民皆生毛羽。……」に見られる「羽民」系譜を求められるものと思う。

⑤『釈日本紀』卷十・述義六・景行の「佐伯部」の説明で、「公望私記」が所引している「曆録」に、

曆録第一云々。其毛人等。且夕叫咷。其聲嚴厲。故倭姫号爲佐祁毗。今謂佐伯是也。とある。

⑥『東大寺諷誦文稿』に

假令此當國方言毛人方言飛驒方言東國方言とある。

⑦成尋『參天台五臺山記』延久四(一〇七二)年十月十五日条で、日本風俗に関する宋皇帝の下問への成尋の答書に、

一問。本國去毛國近遠。答。去毛國近遠不知。

とある。³⁶この表記が宋皇帝の下問に基づくものとすれば、宋代でも「毛國」表記を用いていたと言えよう。また逆に、成尋は「毛國」が蝦夷の地であるという認識を持っていない事がわかる、十一世紀の日本での蝦夷に関する知識を理解する上で、興味深い記事である。

⑧「毛人」はむしろ人名に多く用いられた(表1)³⁷。時代としては、七世紀から九世紀初めであり、特に八世紀を中心に用いられたようである。

「毛人」表記の例を、便宜上とりあえず次のように分類し、考察を進めたい。

A、特定の地域や、その住民をさす

A1、蝦夷とは限定できないが、広く東方一般を指している…①

A2、明らかに東北地方のいわゆる蝦夷を指している…③④⑤⑥⑦②

B、人名として固有名詞になっている…⑧

B1、蝦夷としてのエミシに由来する

B2、武勇にすぐれた人という意味のエミシに由来し蝦夷とは関係ない

表 1

	[年 月]	[人 名]	[出 典]
1	皇極天皇癸卯(643)年10月	蘇我豊浦毛人	『上宮聖徳法王帝説』
2	藤原京(694~710)	那貴首毛人	『藤原宮木簡』1-56
3	藤原京(694~710)	針間國造毛人	『藤原宮木簡』2-70
4	和銅4(711)年4月	高橋朝臣毛人	『統日本紀』和銅4年4月壬子条
5	和銅7(714)年4月	小野朝臣毛人	『統日本紀』和銅7年4月辛未条など
6	神亀元(724)年12月	林連毛人	天平11年「伊豆國正税帳」2-198
7	神亀3(726)年正月	葛井連毛人	『統日本紀』神亀3年正月庚子条
8	神亀3(726)年	毛人(戸主出雲臣真足奴)	神亀3年「山背國愛宕郡雲上里計帳」1-338
9	天平7(735)年9月	大石毛人	天平7年9月「経師写紙并給施布案」7-42
10	天平9(737)年2月	他田毛人	天平9年2月「写経校紙并筆直錢注文」7-101など
11	天平14(742)年	下火首毛人賣	天平14年「近江國古市郷計帳」2-328
12	天平15(743)年5月	佐伯宿禰毛人	『統日本紀』天平15年5月癸卯条など
13	天平17(745)年4月	日下部酒人連毛人	天平17年4月「造酒司解」2-407
14	天平18(746)年4月	阿部朝臣毛人	『統日本紀』天平18年4月癸卯条など
15	天平20(748)年正月	秦毛人	天平20年正月「千部法華経充本帳」3-10など
16	天平21(749)年正月	大倭毛人	天平21年正月始め「請千部法華経筆墨帳」10-14など
17	天平勝宝元(749)年12月	佐伯宿禰今毛人	『統日本紀』天平勝宝元年12月丁亥条など
18	天平勝宝2(750)年2月	子毛人(官奴)	天平勝宝2年2月「官奴司解」3-361など
19	天平勝宝4(752)年12月	壹伎毛人	天平勝宝4年12月「写書所経疏奉請帳」12-386
20	天平勝宝6(754)年12月	辛毛人→広田毛人	天平勝宝6年12月「経師等紙筆墨充帳」10-570など
21	天平宝字2(758)年2月	惹原毛人	天平宝字2年2月「画工司移」4-259など
22	天平宝字2(758)年7月	辛國連毛人	天平宝字2年7月「造東寺司移」13-486など
23	天平宝字2(758)年8月	中臣朝臣毛人	『統日本紀』天平宝字2年8月庚子朔条など
24	天平宝字2(758)年9月	広田毛人→辛毛人	天平宝字2年9月「東寺写経所解」4-304など
25	天平宝字5(761)年正月	丸部毛人	天平宝字5年正月「装束忌日御會司牒」15-5など
26	天平宝字7(763)年正月	文礼毛人	天平宝字7年正月「造物所解」16-318など
27	神護景雲2(768)年2月	韓鉄師 登毛人→坂本毛人	『統日本紀』神護景雲2年2月癸卯条
28	宝亀元(770)年10月	神服連毛人女	『統日本紀』宝亀元年10月癸丑条など
29	宝亀3(772)年正月	伊福部宿禰毛人	『統日本紀』宝亀3年正月甲申条
30	宝亀6(775)年8月	大伴宿禰毛人	宝亀6年8月「丈部新成解」23-485
31	宝亀11(780)年12月	坂本毛人→韓鉄師 登毛人	宝亀11年12月「西大寺資財流記帳」『寧楽遺文』上-414
32	平城京(710~784)	子部毛人	『平城京発掘調査出土木簡概報』3-12
33	平城京(710~784)	葛木毛人	『平城京発掘調査出土木簡概報』5-10
34	平城京(710~784)	大伴部毛人	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
35	平城京(710~784)	大麻部毛人	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
36	平城京(710~784)	雀部毛人	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
37	平城京(710~784)	白部毛人	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
38	平城京(710~784)	当麻百毛□(人カ)	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
39	平城京(710~784)	酒部毛□(人カ)	「下野國河内郡上神主麁寺出土古瓦銘」
40	弘仁10(819)年10月	田口朝臣毛人	『類聚國史』99、叙位

Aは、中国での「毛人」表記本来の意味を踏襲した用法である。日本の中央政府の支配領域拡大に従って、時代が下るにつれて、A1↓A2のように対象とする地域が広がっていったと思われる。

一方Bについてだが、これまで人名としての「毛人」については、これまで次のような解釈が成されてきた。

まず高橋富雄氏は、「中央の人名に関するもの」とした⁽³⁸⁾。それに対し加藤謙吉氏は、東北地方に近い下野國という地域や、氏族伝承や東北経営上で蝦夷と関係がある佐伯氏・阿倍氏に「毛人」が存在している点を根拠に、「毛人」「蝦夷」の人名を検討すると、実際に辺境の民である蝦夷（毛人）との接触の中で形成された人名が少なからず存在するようである⁽³⁹⁾との見解を発表した。これについては最近、塚口義信氏が支持している⁽⁴⁰⁾。実際、下野國などを見ると、加藤氏や塚口氏の言うように、東北地方の蝦夷に由来する人名「毛人」があつたとしてもおかしくない。

しかし佐伯有清氏が指摘するように、「毛人」の人名は播磨・讃岐・山背にも分布しており、階層的にも「下は奴」から「上は高級官人までひろく名づけられたもの」であることから、「毛人」を必ずしも蝦夷と結びつけることはできないと思われる⁽⁴¹⁾。蝦夷に由来しない人名も確実に存在したのである。その意味で、前者をB1、後者をB2として区別する。

人名「毛人」、特にB2について「卑賤の有無」という視点から見てみると、現在のところ、門脇禎二氏の「毛人という毛深く男らしい表現⁽⁴²⁾」や、児島恭子氏の「勇猛な人々というイメージ⁽⁴³⁾」などの意見がほとんどで、後に述べる表記「蝦夷」と違って、ほぼ卑賤視されていないことがわかる。

以上から私は、「毛人」にはA1やA2およびB1のような中国的な地域表記ならびにそれに基づく人名と、特に地域限定のない勇猛なイメージのB2、といった二つの異なった性格があると考えられる。そして、その二つには次のような意味があろう。

・A1・A2・B1の使われ方の源流は、表記「毛人」の借用先である中国であり、表記「毛人」借用当初からの意味である。

・B2はそれ以前から日本にあつた呼称エミシの本来的な意味であつて、中国由来の表記「毛人」と結びついた時点で「毛人」に付与された意味である。

表記「毛人」以前から、呼称エミシが日本に存在した根拠にふれておこう。

「毛人」は史料における傍訓から、エビシ・エビスと呼称されていたことがわかる。従来エビシ・エビスはエミシが転訛したものとされているので、本来的には「毛人」はエミシだと考えて良からう⁽⁴⁴⁾。

ところで、「人」とする地域名・人名には、いくつかの例があるが、例えば「肥人」がウマヒト・コマヒト・クマヒト（クマビト）・ヒヒト（ヒビト）・ヒノヒトなど多様な呼称を持つているのに対し、「毛人」は一貫してエミシ（エビシ・エビス）である。これは、「肥人」の場合表記が先にあつて、それを訓じたためさまざまな解釈が出てきたのに対し、「毛人」はその表記の登場時からエミシという呼称と結びついていた可能性を示唆する。

「毛人」と同様、一表記一呼称のものに「隼人」「ハヤト」、「東人」「ア

ヅマヒト（アヅマビト・アヅマンドも濁音化したか撥音便化しただけの違いで本来同一のものである）がある。しかし「隼人」はハヤナト（ヒト）、「東人」はアヅマヒトと、いずれも表記を訓じた呼称なのに対し、「毛人」はどう訓じてもエミシにはならない。したがって呼称が先にあり、それに意味的に符合する表記を当てはめた、と考えられよう。

C 《表記「蝦夷」の起源（由来）》

「蝦夷」表記の由来についての説には、次のようなものがある。

第一番めの説は、日本で作られた表記が、唐の顕慶四（六五九）年、斉明天皇五年に、倭国の使節第四次遣唐使が蝦夷を同行して長安に入朝した際、中国に運ばれたとする高橋富雄氏・佐伯有清氏らの説である。⁽⁴⁶⁾ この説はさらに次の二つに分けることができる。

高橋氏は、卑賤を表現するためにエビシのエビの音を「蝦」という字で表し、それまで一般的なエミシの意で用いていた「夷」字に付して特別なエミシを表すもの、とした。この説を継承した門脇楨二氏は、「蝦夷」というのは「まぎれもなく、日本古代貴族らが学びとりはじめた中華思想の裏返し」として出てきた蔑称である⁽⁴⁷⁾。また虎尾俊哉氏も「要するに人間でない動物を示す語を用いることによって、明らかに蔑視・敵対の観念を強調していることになる⁽⁴⁸⁾」とする。

一方佐伯氏は「蝦」字の由来に中国史料を引用し（参考にすべき中国史料は『山海経』『爾雅翼』『別国洞冥記』『交広記』『旧唐書』『新唐書』『通典』『唐会要』『宋史』などであるが、これに関しては小口雅史氏が引用の誤りなどを正してまとめたものがある⁽⁴⁹⁾）、これらから、「蝦」は、

鬣の多いことや、鬚の長いこと、すなわち毛深さを表現したものであり、その意味で「毛人」に「蝦」が結びつき、さらに当時「毛人」をエビシと呼んでいたため、発音でも結びついた、と説明している。

二番めに、「ものの数にならないへなちよこ軍隊のことを「蝦兵蟹将」と言うから東方の強力な異人を恐れるあまり、東夷を「蝦夷」と表現した」と推定する浅井亨氏の説がある⁽⁵⁰⁾。

三番めに、中国の表記が日本にもたらされたとする児島恭子氏の説である。児島氏は「元代の骨嵬、明代の苦兀、苦夷、清代の庫野、庫頁、庫葉などは後世のものではあるが、蝦夷と音が近い kuye、kui、koe、⁽⁵¹⁾ k'uei」であるとし、「現代でもアムール川下流やサハリン住民のうちトゥングース・満州系諸族が ⁽⁵²⁾ kui、ニヅヒが kuyi と呼んでいる民族がアイヌである」点から、「蝦夷」は中国においてアイヌの先祖を音訳によって表記し、それが日本にもたらされたもの⁽⁵³⁾と考える。菊池徹夫氏の近年の論稿もこの説を採っている⁽⁵⁴⁾。

以上が主な説だが、これらの議論は既に戦前より始まりつつあった点⁽⁵⁵⁾は、以前に若干触れておいた。今、主要な論点を整理すると次のようになろう。

「起源1—なぜ「蝦夷」という表記ができたのか」

A、意味（「蝦（えび）」に由来

a、『山海経』などに現れる東北方面の多毛な集団「毛人」（実在したかは不明）に「蝦」の多毛が結びついた

b、形質人類学的に多毛である民族（例えばアイヌ）に実際に接触し、

それを「蝦」の多毛と結びつけた

c、「蝦」(えび)の持つ卑賤なイメージ

c'、「蝦」(えび)の持つ弱いイメージ(強力な異人を恐れるあまり、

「蝦兵蟹将」のように威力弱体を願い、「蝦」字を用いた)

B、音訳に由来

a、カイと称される人々に対して「蝦夷」を当てた。

a'、カイと称される人々に対して「蝦夷」を当てた。その際、「蝦」と

「夷」字を選んだのは、「蝦」(えび)の持つ卑賤なイメージと「夷」

字に含まれる中華思想ゆえである。

b、エビシ(ス)に当てた

「起源2」どこで作られた表記か

ア、日本

イ、中国

ウ、中・日合作

この分類に基づけば、高橋・門脇・虎尾氏はA―c・ア、佐伯氏はA

―a、B―b・ア、浅井氏はA―c'、児島氏はB―a・イ、菊池氏はB

―a'・ウとなる。

まずA―c(c')だが、卑賤を表現するために「蝦」字が用いられた
とすると、人名の「蝦夷(蜃)」(例えば佐伯今蝦蜃)を説明できない。

また、「蝦」は『延喜式』巻五、神祇五、齋宮の「供新嘗料」に「蝦鱸槽

二口」と出てくるように、古代でもむしろめでたいものとして認識され
ていたと思われる(傍線筆者)。以上より、可能性としては弱いだろう。

つぎにB―aの児島氏の説は魅力的だが、「元代から今日までの呼称が
ほぼ同一なら、元代をさかのぼって唐以前にもそう呼ばれた可能性を考
えることを許してくれそうである」とするのは、少々説明不足の感があ
る。もし唐以前にそう呼ばれたとしても、元代以降の例の第一音はみな
kuかkoで、kaではない。他にku音やko音の字が数多いのにka音の

「蝦」字を選んだ理由も不明確である。この点に関連して、浅井亨氏も

「蝦」は字典によれば、韻字は下平声の麻で表わされ、漢音「カ」、呉
音「ゲ」でへがま、かえるの意、漢音「カ」、呉音「ケ」でへえび、し
ゃくくの意とある。現代中国語では[xia]へえび、[ha]へひきがえる
で、夷(蝦夷)[xiayi]へえぞくとなっている。蝦夷がいわゆる反切に類
する用法であれば、その読みは「キー」「ヒー」に近い音となる(下略)
のように述べている。仮に「蝦」字が採用された点を認めたとした場合、
「蝦」と「夷」の字が選ばれたのを偶然で片付けるには問題が多い。

B―aを深め、「カイ」音を漢字表記する際に、とりわけ「蝦」およ
び「夷」字をあてたのは、主として中国側、強いていえば中国側主導で
のいわば中・日合作だと思われるが、そこに「蝦(海老)のように髭の
長い」といった中華思想的蔑視の観念が込められていたことは当然考え
てよい」と述べたのは菊池徹夫氏である。⁵⁴ 菊池氏はさらに、アイヌの自
称に「*ay*」音が多いことなどを根拠に「蝦夷(カイ)説」を補強する。
だが、やはりそのアイヌ語も新しい時代のものであり、それがどの位ま
で溯り得るかは、実証の方法がみつからない。よって否定はできないが、

現時点では認めてしまうことも苦しい。今後の検討が待たれる。

Bーbは、エミシとエビスの混用を確認できるのが八世紀以降であつて、斉明朝七世紀にエビスという呼称が存在したかと言う問題点がある。エビとエミは転訛可能であるから、エビシに「蝦」が結びついたというのも一見うなづけるが、この当時、甲殻類節足動物を、「エビ」という日本語で呼んでいた確かな証拠も史料には見られず、「蝦」という字と日本語「エビ」が結びついた時期はなおさら不明である。また、シに「夷」が何故対応するのか説明も不明確な点を考えると、むしろとりあえず、エビシという音とは関係なく、純粹に多毛で「深山之中。止住樹本。」といった習俗・風習に由来すると考えておいた方が良さそうである。

このように考えると、佐伯氏が述べているようにAーaの考え方が、今のところ妥当なものと思われる。ただあくまで『山海経』などに由来する「東方の「毛人」は多毛」というイメージを前提として、それに概念上、多毛のシンボルとしての「蝦」が結びついた、という程度に考えるべきであろう。佐伯氏のあげた史料では、「蝦」の説明と「蝦夷」の使者の説明にいずれも「蝦多鬚」「鬚長八尺」「蝦鬚長一丈」「鬚長四丈四尺」「須長四尺許」「鬚長四尺」といったよく似た描写がある。Aーbのように多毛の人々が実在し、それを見て「蝦」になぞらえたとは、ここでは言い切れない。というのは、当時（形質人類学的にみた）多毛な人々が実在したかどうか確かめることができないからである。アイヌ⇨多毛⇨「蝦」という等式を見るが、アイヌ語の存在こそ確認できても、形質人類学的な意味や民族としてのアイヌは古代においては明確に確認できないのが現状である。

残る問題は、「蝦夷」表記が中国で成立したか日本で成立したか、という点である。

児島氏の言うように、「毛人」や「肅慎」が中国の表記に由来している点を考えて、「蝦蚨」や「蝦夷」が中国由来の可能性もある。ただ、『新唐書』などを見るかぎり、「蝦夷」は「海島中」にて日本の使者と共にやってきたことになっており、アムール川下流域のように中国と陸続きの場所に住んでいることにはなっていない。また「蝦夷（蚨）」は、「毛人」や「肅慎」と違って倭乃至日本との関連において登場するのみで、他に所見はない。したがって、日本で創作されたとする説も、また中日合作とする説も捨て難い。歯切れは悪いが、結論は保留したい。

その後、『続日本紀』段階になると、「蝦狄」「蝦賊」「蝦虜」など、「蝦」を共通項にした表記が登場する。⁽⁵⁵⁾これらの「蝦狄」「蝦賊」「蝦虜」は、カイなどの音訳に由来するという説明では解釈できないし、中国史料にも見られない点で、「蝦夷」からアレンジした日本的な表記と言えよう。

D《表記「蝦夷（蚨）」の出現時期・始用背景と表記「毛人」との関係》
次に、表記「蝦夷（蚨）」出現時期とその始用の背景を探ってみよう。はじめに、『日本書紀』の「蝦夷（蚨）」を少し見てみることにしよう。その特徴は坂本太郎氏の研究に明確に指摘されている。⁽⁵⁶⁾

坂本氏は『古事記』と『日本書紀』の蝦夷関係記事を比較し、「古事記」は、蝦夷の名稱や存在について特別の關心はなく、ただ東方のまつろわぬ人人は蝦夷ともよばれたということを、單なる事實として認識して「たに過ぎない」と述べる。そしてこれは「帝記や舊辭が蝦夷に無關心で

あったことを示し、それは「帝記舊辭の傳承せられ、筆録せられた六世紀頃までの間、蝦夷に對して記憶に値するほどの大きな征討の行われなかつた」ためとする。さらに『日本書紀』の蝦夷関係記事を調査した結果、「大きな變りめが齊明天皇の時代にある」として、これ以降はその前に比べて、具体的な数の記載や征討時の場所・軍勢の具体的な記事が見られる点を指摘した。すなわち「蝦夷に關する古い所の記事は、史料としての信憑性はきわめて乏しく、「せいぜい七世紀以降における東國への關心の高まりによつて明らかにされた蝦夷の實情が、そこに投影されているということぐらいいしか云うことはできない」と結論づけた。

ただし坂本氏は、皇極紀あたりから実録のきざしもあるとしており、孝徳紀すなわち大化期あたりに実録と潤色の境をほぼ設定できよう。そうすると、「蝦夷」表記も確実なものは、これ以降ということになる。

坂本氏の見解に対する大きな批判は今のところなく、齊明朝の北方遠征記事については最近多くの研究が成されているが、若月義小氏が実年代を天武・持統朝にまで下げようとしている他は、みな「紀」の紀年のごとく齊明朝のこととして理解しており、私もそれに従いたい。⁽⁵⁷⁾

この七世紀中葉という時期には、史料では淳足柵・磐舟柵・都岐沙羅柵が設置されているほか⁽⁵⁸⁾、発掘成果によれば、仙台市郡山遺跡・古川市名生館遺跡など官衙的構造を持つ「城柵」遺跡が報告されており⁽⁵⁹⁾、東北政策が具体化したことがわかる。

古い時代の史料の実年代が信用できないため、「蝦夷」の正確な始用時期を割り出すのは困難だが、以上の点から考えて、皇極〜齊明紀以降の東北政策との関連が考えられよう。

ところで、『日本書紀』では「蝦夷」のほかに、「蝦虺」という表記がある。以下の中国史料を見ても、「蝦虺」という表記が「毛人」と「蝦夷」の間に確認できる。

* 『宋書』卷九七、夷蛮伝、倭国

封国偏遠。作藩于外。自昔祖禰。躬擐甲冑。跋涉山川。不遑寧处。東征毛人。五十五國。西服衆夷。六十六國。渡平海北。九十五國。

* 『舊唐書』卷一九九上、東夷伝、倭國日本

其國界東西南北各數千里。西界南界咸至大海。東界北界有大山爲限。山外即毛人之國。

* 『新唐書』卷二二〇、東夷伝、日本

未幾孝徳死。其子天豊財立。死子天智立。明年使者与蝦虺人偕朝。蝦虺亦居海島中。

其使者須。長四尺許。珥箭於首。令人載瓠立數十步。射無不中。

* 『通典』卷一八五、边防、蝦夷

蝦夷国海島中小国也。其使鬚。長四尺。尤善弓矢。挿箭於首。令人載瓠立。數十步射之。無不中者。大唐顯慶四年十月。随倭国使人至入朝。

* 『唐会要』一〇〇、蝦夷国

蝦夷。海島中小国也。其使至鬚長四尺。尤善弓箭。挿箭於首。令人載

瓢立。数十步射之。無不中者。顯慶四年十月。隨倭国使至入朝。

* 『宋史』卷四九一、外国伝、日本国

國之東境接海島、夷人所居、身面皆有毛。東奥州産黄金、西別島出白銀、以爲貢賦。

この「蝦蟇」という表記の存在に関しては、古く喜田貞吉氏、藤澤義美氏⁽⁶¹⁾の指摘があったが、それ以来、議論されることはほとんどなかった。そうした中、近年佐伯有清氏が「蟻」字について言及している。

佐伯氏は、まず「蝦夷」と「蝦蟇」の表記上の相違が、『日本書紀』編者や編集時期の違いによつた可能性を検討するが、三つのグループにまたがっているため、その可能性を否定する。そして、「もともと『日本書紀』が材料とした「資料」に、すでに違つた用字で記されていたことにもとづくとし、その上で、坂本太郎氏の蝦夷関係史料の類別にしたがつて「蝦蟇」の記載のある史料を検討した結果、ほとんどが「実録型」に属することを指摘する。結果として「蝦蟇」と表記される段階が「毛人」と「蝦夷」の用字との間に存在していた」とし、それはさらに、先に列挙した中国史料における「毛人」↓「蝦蟇」↓「蝦夷」の変遷に対応することを述べている。この点に関しては全く異論はない。実際、「蝦蟇」の初見は皇極紀であり、坂本氏によつて史料的信憑性が乏しいとされた、舒明紀以前の古い時代の史料はみな「蝦夷」表記で統一されている。

以下、佐伯氏の考証を結果のみ掲げる。「蝦蟇」の使用された時期だ

が、『新唐書』で「蝦蟇」を載せる記事と同様の記事が『通典』や『唐会要』や『日本書紀』、『伊吉連博徳書』に記されており、それが顯慶四年⁽⁶¹⁾ 齊明天皇五(六五九)年であることから、「蝦蟇」は齊明天皇五年当時使用されていたことが言える。また、「伊吉連博徳書」は「蝦夷」になっているが、この書の述作された年代が持統四(六九〇)年以降であることから、それより前と考えられる。

佐伯氏はまた「蟻」字に着目し、それは本来、山にすむ虫や鳥をあらわしているものであつて、「夷」字に見られる王化を意識した強い中華思想とは区別されるものと考えている。つまり、「蝦蟇」は彼らの生活が「深山之中。止住樹本」(『日本書紀』齊明天皇五年七月戊寅条所引「伊吉連博徳書」とされていた当時の認識に基づいているのであり、まさしくその風貌・習俗を端的にあらわした表記、とする。したがつてこの「蝦蟇」表記の時点ではまだ忌避される存在ではなく、「毛人」以来の勇敢なイメージが残っており、やがて「夷」字が用いられる時が中華思想の具現と考えているのである。

さて、ここで「毛人」と「蝦夷(蟻)」の関係を見てみよう。

まず「蝦夷(蟻)」はエミシ・エミス・エビス・エゾと呼称されている。このうちエミス・エビスの初見は八世紀、エゾの初見は十一世紀なので、本来はエミシと呼称され、それが転訛してエミス・エビスになつたと考えられる。その点では「毛人」の呼称と同じであり、人名などを見ても、同一人物に「毛人」「蝦夷(蟻)」の両方が使用されている場合が認められる。

古代東北地方ならびにその人々を表すのに、『六国史』は一貫して「蝦夷（蜃）」表記を採用している。先に呼称「エミシ」と表記「毛人」に内包される二つの意味、①武勇にすぐれる人、②特に東方の「魁帥」的な人（ヤマト朝廷の経営の対象拡大により、やがて東北地方に限定されてくる）、を述べたが、この「蝦夷（蜃）」はその始用時から②の意味を強く有していたといえよう。人名にも若干の例があるが、それは「毛人」同様「エミシ・エミス・エビス」と呼称するゆえであり、「毛人」に比べて相対的に少ないのは明らかである。逆に言えば、「毛人」が八世紀の人名に多く、古代東北地方とそこの人々を指さなくなったのは、「蝦夷（蜃）」が始用されることで、結果的に①「毛人」、②「蝦夷（蜃）」と意味の分担が行われたためと思われる（但し呼称を共有していたので①に「蝦夷（蜃）」、②に「毛人」を用いることもあった）。

「蝦夷」の「蜃」字については、先の佐伯説を支持するとして、「蝦夷」表記の方はおそらく、律令制度の整備や畿内制の成立などを経、中国的な華夷思想が強まることを背景に成立した表記ではなからうか。

「蜃」を「夷」字に変えたのは、『通伝』巻一百八十五・邊防一・東夷上・序略に見られる、

東夷有九種。曰吠夷・方夷・千夷・黄夷・白夷・赤夷・元夷・風夷・陽夷。…

といった一連の「：夷」のように、華夷観念のもとに「：夷」と名付けられたものの一つと解釈するのが妥当かと思われる。

後に空海や『釈日本紀』に「毛人」表記が用いられているが、この時代には「蝦夷」表記がほとんど使用されなくなっており、「古典に範を求

めた」結果、「毛人」表記を採用したのであろう。

註

(1) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第四回 神武紀歌謡における「愛瀨詩」の考察（『弘前大学國史研究』九四、一九九三―三）。

(2) 黛弘道「上毛野国と大和政権」（上毛新聞社、一九八五―二）

(3) 小口雅史「蝦夷」表記論の新展開（弘前大学人文学部特定研究報告書「文化における「北」所収、一九八九―三）を参考にした。

本稿は、この小口論文に大きな影響を受けており、引用・参考にした部分が多い。以後、逐一ことわらない無礼をお許しいただきたい。

(4) 前野直彬「全釈漢文大系山海経・列仙伝」（集英社、一九七五―一〇）の解説による。

(5) 児島恭子「エミシ、エゾ、「毛人」「蝦夷」の意味―蝦夷論序章―」（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『竹内理三先生喜寿記念論文集・上巻・律令制と古代社会』所収、東京堂出版、一九八四―九）。なお、『山海経』などには「毛人」でなく「毛民」として出てくる件に関してだが、児島氏は「（前略）意味からすれば、毛民も毛人も同じであるし、『宋書』に「毛人」を採用し、『旧唐書』にも「山外即毛人国也」と使用しているので、毛民と毛人の間に意味の差異は認められていなかったと思われる」としている。また晋の郭璞の注から、「毛人」と「毛民」が同一であることを、ここで確認しておきたい。

(6) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第二回「夷」表記の意味の変化について―ヒナとエミシー」(『弘前大学國史研究』八八、一九九〇―三)にて詳しいことは述べた。

(7) 註6に同じ。

(8) 児島恭子「エミシ」「エゾ」は何を指しているのか」(『別冊宝島 EX アイヌの本』所収、宝島社、一九九三―九)。

(9) 荒木陽一郎「東北古代史研究講座」蝦夷の呼称・表記をめぐる諸問題―第三回 十世紀以降の「蝦夷」表記と「俘囚」表記について―」(『弘前大学國史研究』八九、一九九〇―一〇)。

(10) 註1に同じ。

(11) この諸説整理に関しては、工藤雅樹「古代国家と蝦夷」、『国史談話会雑誌』二三(関晃先生退官記念号)、一九八二―と菊池徹夫「蝦夷(カイ)説再考」(『史観』一二〇、一九八九―三)を参考にした。

(12) 本居宣長『古事記伝』二十七之卷。

(13) 村上島之丞「蝦夷島奇観」(二七九九)、松浦武四郎『天塩日誌』(一八六一)。

(14) 坪井九馬三「蝦夷考」(『考古学雑誌』四―三、一九一三―一)。

(15) 金田一京助「アイヌの研究」(内外書房、一九二五―二)、大野晋『日本語の起源』(岩波新書青版二八九、岩波書店、一九五七―九)、田村すず子「アイヌ語と日本語」(『岩波講座 日本語』一二、岩波書店、一九七八)。

(16) 喜田貞吉「蝦夷」から「アイヌ」へ名称の変遷」(『東北文化研

究』二―一―四、一九二九―四・五・九、一九三〇―三。その後、同『喜田貞吉著作集第九卷 蝦夷の研究』に収録、平凡社、一九八〇―五)。

(17) 註11の工藤論文による。

(18) 高橋富雄「蝦夷」(吉川弘文館、一九六三―一〇)、『古代蝦夷―その社会構造』(学生社、一九七四―七)。新村出「日本語かアイヌ語か」(『民族と歴史』所収、一九二〇―二二)、後に『新村出全集』第一卷(筑摩書房、一九七二―四)に収録。

(19) 山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」(新野直吉・山田秀三編『北方の古代文化』、毎日新聞社、一九七四―七)、後に『アイヌ語地名の研究』第一卷(山田秀三著作集、草風館、一九八二―六)に収録。

山田氏は晩年、関東北部から新潟県のアイヌ語地名を研究し、「南のアイヌ語地名?―福島県、関東北辺の散策記―」(『北奥古代文化』一七、一九八六―一)や『東北・アイヌ語地名の研究』(草風館、一九九三―八)を発表されているが、研究半ばでお亡くなりになった。

(20) 山田秀三「アイヌ地名・アイヌ語の古さ」(『北海道考古学』一二、一九七六―三、後に『アイヌ語地名の研究』第一卷(前掲註19)に収録)、及び『東北・アイヌ語地名の研究』(前掲註19)。

(21) 千葉大学文学部助教授(アイヌ語) 中川裕氏との会話に示唆を得た。

(22) 児島恭子「エゾの語源について」(早稲田大学語学教育研究所 北方言語・文化研究会・一九八六年五月例会報告:於・早稲田大学:)

の口頭報告に示唆を得た。なお、報告要旨が次の紀要に収録されている（幹事田村すず子「北方言語・文化研究会成果報告（18）」、『稲田大学語学教育研究所紀要』三五、一九八七）。

(23) 浅井亨「蝦夷語のこと」（大林太良編『日本古代文化の探求 蝦夷』所収、社会思想社、一九七九—九）。

(24) 児島恭子「エゾの語源について」（前掲註22）のレジюмеによる。

(25) 註23、註24に同じ。

(26) 註22に同じ。

(27) 註11の菊池論文による。

(28) 註1に同じ。

(29) 児島恭子氏も註22の報告要旨の中で「用例の収集はもちろんのこと、アイヌ、クルヤピト、カムイとの対比と合せてエンチウの意味を考える必要がある、基本的な作業を抜きにしてエゾの語源として認めることはできない」とされている。

(30) 諏訪哲郎「東ヒマラヤのモンパ族の文化語彙に見られるチベット語からの借用—モンパ族の基層文化への接近の試み—」（『学習院大文学部研究年報』二九、一九八三—三）。

(31) 佐々木利和「アイヌイタク エラム アナ」（『歴史評論』四八一、一九九〇—五）。

(32) 白尾忠悦「交通と言語—蝦夷から北海道の場合—」（『歴史評論』四五七、一九八八—五）。

(33) 佐々木利和「中古・中世における蝦夷の風俗について—聖徳太子絵伝によるアプローチ—」（北海道文化財保護協会『北海道の文化』

二五、一九七二—八）。

(34) 例えば、北海道・東北史研究会のシンポジウムにおける菊池徹夫氏を中心とする議論（『北からの日本史』第2集、三省堂、一九九〇—七および『海峡をつなぐ日本史』三省堂、一九九三—七を参照）や、菊池徹夫「オホーツク文化と擦文文化・アイヌ文化との関係」

（大井晴男編『シンポジウム・オホーツク文化の諸問題—その起源・展開・社会・変容—』所収、学生社、一九八二—二。後に菊池『北方考古学の研究』に収録、六興出版、一九八四—二）など。

(35) これ以外にも、土器などに書かれた出土文字史料にも所見があるが、集めきれず、ここでは省略する。

(36) 平林文雄「参天台五臺山記 校本並に研究」（風間書房、一九七八—六）、また、この史料の存在などについては、石上英一「古代東アジア地域と日本」（講座日本歴史 二、古代2）所収、東京大学出版会、一九八四—二）に多く示唆を得た。

(37) 佐伯有清「古代蝦夷史についての一考察—「エミシ」の用字を中心として—」（『北方文化研究』一七、一九八五—七）の表をもとに、加筆して作成した。

(38) 高橋富雄「古代蝦夷」（前掲註18）。

(39) 加藤謙吉「蘇我氏と大和王権」（第三—蘇我氏の地方進出形態、吉川弘文館、一九八三—二）。

(40) 塚口義信「蘇我蝦夷・入鹿の名の由来」（『東アジアの古代文化』五〇号記念特大号、一九八七—一）。

(41) 註37論文による。

(42) 門脇禎二『蘇我蝦夷・入鹿』(吉川弘文館、一九七七年一一二)

(43) 註5に同じ。

(44) 『記紀』の「蝦夷(蜃)」例は八〇箇所以上あるが、これらのうち

当初から訓注でエミシと訓むとしてあるものは一箇所もない。したがって『記紀』成立当初、これらを何と訓むべきものとして表記したのか明らかでない。『日本書紀』の平安期の古訓(例えば永治二(一

一四二)年の宮内庁図書寮本)にはエミシ、エヒシ、エヒスが混在

している。言葉の意味は置いておくとして、単に古さから考えれば、エミシは神武紀歌謡に「愛瀾詩」という形で見えている点、対する

エビスは養老期に下りそうな点(『釈日本紀』秘訓四「養老説」で「蝦夷」を「衣比須」としているほか、養老五(七二二)年の下総國葛

飾郡大嶋郷戸籍に「孔王部衣比須」という人名が見える)から、エ

ミシ↓エビシ↓エビスという変遷が想定できる(以上、児島恭子前掲註5・註22を参考にした)。

(45) 中村明蔵「肥人をめぐる諸問題」(『隼人文化』一三・一五に初出。その後、同『熊襲・隼人の社会史研究』、名著出版、一九八六―五に収録)。

(46) 註18、註37に同じ。以下、佐伯氏の説は、この註37論文による。

(47) 註42に同じ。

(48) 虎尾俊哉「若い世代と語る日本の歴史10 律令国家と蝦夷」(評論社、一九七五―七)。

(49) 註3に同じ。

(50) 註23に同じ。

(51) 註5に同じ。

(52) 註11に同じ。

(53) 註23に同じ。

(54) 註11の菊池論文による。

(55) これらの表記の初見は、「蝦狄」が『続日本紀』文武天皇元(六九七)年十二月庚辰条、「蝦賊」が『同』宝亀六(七七五)年三月丙辰条、「蝦虜」が『同』延暦八(七八九)年七月丁巳条である。

(56) 坂本太郎「日本書紀と蝦夷」(『古代史談話會編』「蝦夷」所収、朝倉書店、一九五六―五)、のちに同氏『日本古代史の基礎的研究』上 文

献篇(『東京大学出版会、一九六四―五に収録)。

(57) 若月義小「律令国家形成期の東北経営―その実態と特質―」(『日本史研究』二七六、一九八五―八)。ほか、熊谷公男「阿倍比羅夫北

征記事の研究史的検討」(『東北学院大学論集』創立百周年記念 歴史学・地理学)一六、一九八六―三)や同「阿倍比羅夫北征記事に

関する基礎的考察」(高橋富雄編『東北古代史の研究』所収、吉川弘文館、一九八六―一〇)などを参照した。

(58) 『日本書紀』大化三(六四七)年是歳条に「淳足柵」、『同』大化四(六四八)年是歳条に「磐舟柵」、『同』斉明天皇四(六五八)年七月辛巳朔甲申条に「都岐沙羅柵」が初めて登場する。

(59) 工藤雅樹「日本の古代遺跡15 宮城」(保育社、一九八四―一〇)。

(60) 喜田貞吉「「蝦夷」から「アイヌ」へ―名称の変遷」(前掲註16)。

(61) 藤澤義美「中國史書に於ける蝦夷関係史料について」(『季刊 岩

『手史学研究』二、一九四九―二。

(62) 北村文治「伊吉連博徳書考」(坂本太郎博士還暦記念会編『日本古代史論集』、吉川弘文館、一九六二―九)

(付記)

本稿は、一九八八年一月に学習院大学大学院に提出した修士論文の第二章第二節・第三章第一節・第三章第二節を元に、一部新しい研究成果を取り入れ、大きく加筆・修正を加えたものである。

(あらき・よういちろう 神奈川県私立武相高等学校教諭)